

保育における豊かな創造力と表現を育む音楽活動

—総合的な表現活動の実践を通して—

吉 田 め ぐ

1. はじめに

新しい幼稚園教育要領と保育所保育指針が告示され、音楽は領域＜表現＞に位置づけられた⁽¹⁾。幼稚園教諭養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究の全体目標には「幼児の感性や創造性を豊かにする様々な表現遊び」という言葉が述べられている⁽²⁾。保育における「表現」について音楽や絵画、身体表現など多岐にわたる分野で研究が行われているが、幼稚園教育要領や保育所保育指針の改定に伴い、幼児教育の中で子どもの豊かな表現力や感性を養うための、表現活動の在り方が問われている。本論文では、保育者を目指す学生の創造力や表現の広がりにつながる音楽活動について、保育者養成校で行った授業実践の成果を報告する。

2. 総合的な表現活動の有効性

(1) 音楽表現活動における多面的要素

総合的な視点でアプローチすることにより表現力が拡大する有効性について、スイスでは「うたう」「聴く」「創作する」「演奏する」「身体表現する」「自分のものにして実践する」という6つの領域のもと音楽活動が展開されている⁽³⁾。音楽をすることは同時に聞くことであり、自分のものにして実践するためには創作活動が並行して行われ、それを自分の身体で表現するという、6つの領域は全てが関連して音楽活動が成り立っていることがわかる。また大場(1996)は、例えば歌う活動において「子どもは単純に歌を歌っているわけではなく、もっと様々な経験が膨らんで混ざり合って総合的に体験されており、幼児期においてはこの総合性こそが大事な部分として捉えなければならない」と述べている⁽⁴⁾。表現活動とは、様々な内容が絡み合って自己が表出されることであり、子どもの音楽活動においても様々な要素が含まれているということを、保育者自身理解しておくことが重要である。

(2) 表現活動におけるガイドライン

本実践では、上記に述べたスイスの指導ガイドを以下のように変形したものをベ

ースに、活動内容を組み立てた。

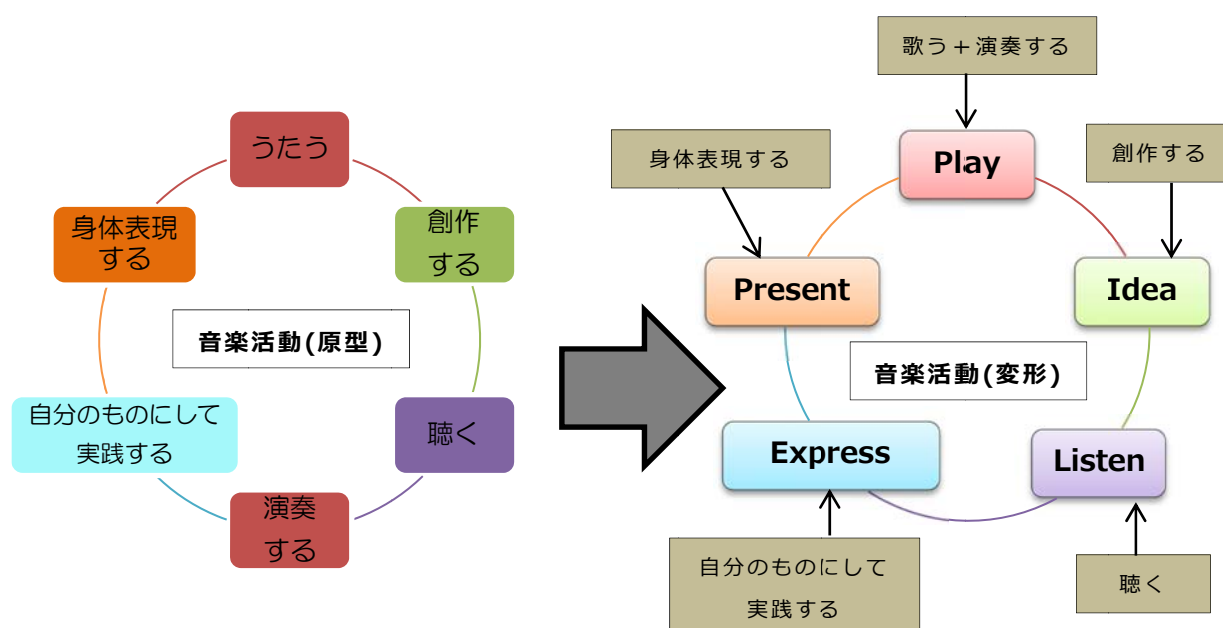


図 1 スイス音楽教育指導ガイドライン

図 2 本実践で活用する変形バージョン

6つの領域より「うたう」と「演奏する」を統合し、他の4つはそのまま取り入れた。これら5つの要素について、実践する際の具体的な内容と、その内容から育みたい力について以下のように定める。

表 1 音楽表現活動モデルプラン

	活動名	活動内容	育みたい力
1	Play	演奏する	音楽力
2	Idea	工夫する	創造力
3	Listen	鑑賞する	感受力
4	Express	表現する	表現力
5	Present	発表する	実践力

Play

音楽において Play とは演奏するということだが、保育で必要な音楽の力とは、歌を歌えること、ピアノなどの楽器演奏ができることだけでなく、音楽遊びの実践や、幅広い音楽の総合的な力が求められることから、「音楽力」とする。

Idea

アイディアという言葉は、理念や概念、思いつきなどの意味を持つが、保育の現

場における Idea とは「工夫する」という言葉が適しているのではないだろうか。日々の保育の中で、保育者は子どもの好奇心や興味を生み出す仕掛けを考え、たくさんの工夫を行う。経験だけでは生み出すことが出来ない、イメージして考え実践する力が必要となった時、そこには創造性が絡んでくる。「創造力」が表現の広がりに関連していると考えた。

Listen

鑑賞について、新・音楽科教育法(2015)では Acception(享受・感受)と Listening (把握・知覚)の両方の働きで成り立っているとしている⁽⁵⁾。見たり聴いたり何かに触れた際に、感じる心や感動できる心を持った子どもを育てたい時、まずは保育者がその感性を備えていなければ実践することは難しい。視覚や聴覚など五感を使って体感し、鑑賞などの様々な経験により養う力を「感受力」とする。

Express

保育における表現について、中根(2014)は保育者を対象とした表現活動における調査を通し「保育者自身が表現することを楽しいと感じ、保育者が表現力を高め、表現に関する視野を広げて子どもに関われれば、子どもの音楽的表現力の向上に影響を及ぼすことがいえる」と述べている⁽⁶⁾。自分の内にあるものを形にできること、それを外部に表し自己を表現できることが「表現力」である。

Present

表現力や創造力があっても、それらを実践する力がなければ保育者として子どもの前に立つのは難しい。この活動から子どもはどんな反応をするだろう、どのような実践が子どもの変化や成長につながるのだろう、などのイメージを持ちなら育みたいものが現場で活かせる力「実践力」である。

(3) ガイドラインに則した実践の組み立て

上記で述べた総合的な表現活動の在り方と、音楽活動ガイドラインをもとに、実践の組み立てを行う。有意義な活動にするため実践の方向性を定め、目標とする成果につなげるため以下の 3 点を組み立ての柱に置く。

複合的な活動内容

養成校における音楽活動というと、ピアノやうた、手遊び、わらべうたなど、特定の活動を授業の組み立てに入れるが、それらの活動に連携を持たせ、さらには音楽だけでない表現活動も融合した実践活動を行う。複合的な活動がベースでつながっており、それぞれの活動から得られる学びと、全体を通して得られる学びと、総合的に学習効果の高い実践につなげたい。

多面的な能力を活かせる内容

ガイドラインに記載した 5 つの力が、実践においてそれぞれの活動で活かせるような内容であることが重要である。そのために、多方面からのアプローチを含む指導計画を作成し、能力が発揮される環境や、活動を通して十分に力が育まれるような実践であることを目標とする。

学生の変化や成長が予測される内容

学生の成長や学びにつなげるためには、実践内容が学生の実態に即したものであることが重要である。難しすぎても容易すぎても、学生のモチベーションや能力の向上にはつながらないため、ねらいの設定や見通しのある授業計画を考慮すること、予想外のことが起きた時にも柔軟に対応し導くことのできる指導の在り方が、実践の有効性にもつながると考えた。

3．実践の概要

（１）対象と期間

平成 30 年度、関東短期大学 1 年次前期選択科目「音楽」の授業全 15 回のうち、5 回を使って本実践を行った。履修者は 1 年生、全 10 名であった。

（２）指導計画

授業科目「音楽」には、以下の授業到達目標が記載されている⁽⁷⁾。

幼児の豊かな感性をはぐくむために自らの音楽表現力を高め、保育現場での音楽活動における指導力および実践力を身に付ける

到達目標と学生の実態を留意し、指導計画と具体的な活動内容を作成した。音楽は選択科目のため、履修した 10 名の学生は比較的音楽が好きな学生や興味がある学生が多く、授業にも意欲的であった。しかし 1 年次の前期科目のため、実習は未経験、保育についての専門知識は少ない状態であった。そこで、入学後間もない学生にとっても身近な保育教材として「手遊び」と「絵本」を取り入れることとした。また、毎時間授業の終わりに学習カードを記入させ、学んだことや心境変化など授業の振り返りを実施した。

表 2 指導計画

時数	授業計画	具体的な活動内容
1	手遊び探し	手遊びの面白さを体感しよう
2	オリジナル手遊び歌づくり	既存のメロディに歌詞をつけてみよう
3	手遊び絵本づくり	世界に 1 つ自分だけの手遊び絵本を作成しよう
4	フリや音づくり	出来上がったオリジナル手遊び歌にフリや音をつけてみよう
5	発表会	現場で実践する時のことを考えてみよう

(3) 実践内容

各回の授業内容と、学生の様子について記載する。

1	手遊び探し	手遊びの面白さを体感しよう
2 - 3 人で 1 グループになり、図書館で手遊びの本などから、覚えたい手遊びや好きな手遊びを 3 つ覚え、それぞれ発表し合った。次回、オリジナル手遊び歌を作成することを伝え、1 人 1 つ題材を選ぶところまで行った。		

まだ知らない手遊びがたくさんあることを実感し、必死になって手遊びを覚える姿や楽しそうに手遊びを探す様子が見られた。友達の前で手遊びを発表する際、恥ずかしいと言いながらも、先生になったらもっと緊張するのかな、など多くの学生が現場での自分をイメージしながら発表をしていた。

2	オリジナル手遊び歌づくり	既存のメロディに歌詞をつけてみよう
好きな手遊びやメロディを 1 人 1 つ選び、そこにオリジナルの歌詞を作成した。メロディからオリジナルのものを作成することも考えたが、1 年生の前期科目であるという学生の実態と、限られた授業回数を考慮し、今回は既存のメロディを使い、歌詞のみ学生が考える活動にした。出来上がった学生から絵本作成の準備を行った。		

本時の「オリジナル手遊び歌づくり」と次回の「絵本作り」では、学生の進度に差が出てくると予想していたため、歌詞がなかなか思いつかない学生には「このメロディ聞いた時どんなイメージがした?」「動物、食べ物、スポーツなど、何かテーマを決めると作りやすいかもしれないね」などのヒントを伝えた。メロディも歌詞の内容も重なった学生はおらず、全学生オリジナル手遊び歌の土台が出来上がった。

3	手遊び絵本づくり	世界に1つ自分だけの手遊び絵本を作成しよう
B5サイズの画用紙に、オリジナル手遊び歌をミニ絵本形式で作成した。タイトル 歌の部分 メロディ譜をつけることを共通事項として、絵の入れ方などは自由に作成することとした。子どもたちの前で作成した絵本を使いながらオリジナル手遊び歌をやるなら、というイメージを持ちながら制作することを留意した。		

多くの学生が、子どもにわかりやすく伝えるためにはどんな工夫が必要か、どのような絵本が子どもの興味や関心をひくか、考えながら制作をしていた。歌詞に合った絵のイメージや、メロディと絵本の関連性に気づき始めた学生もあり、ヒントとして5時間の活動内容がつながっていることを再度伝えた。

4	フリや音づくり	出来上がったオリジナル手遊び歌にフリや音をつけてみよう
絵本が出来上がった学生から、作成した絵本を使って手遊び歌を実際つけてみる活動を行った。どのような手のフリがつけられるか考え、さらに簡単な楽器（鈴、カスタネット、タンバリンなど）を使って音をつけるなどの活動を行った。		

フリや音づくりをしながら、オリジナルの手遊びと絵本を使って、どのように実践するか考え始めた。ただ手遊びをする、絵本を読む...といった考えから、何のために、どのように手遊びや絵本をするか...という考えに変化してきている学生の様子がみられた。

5	発表会	現場で実践する時のことを考えてみよう
実際に現場で実践するならどのようにやるか、ということそれぞれ考え計画してから、発表会を行った。先生になったつもりで発表を行い、自分の発表と他の人の発表についての考察と、本実践を通した学びについて記入をし、まとめを行った。		

発表では、それぞれが異なった流れで発表を行った。先に絵本を見せた方が面白いかな、全部先生がやるんじゃないくて、子どもと一緒に活動できる内容にしたい、手遊びもバージョンをいくつか作ってだんだん盛り上がる活動にしたい、などたくさんイメージとアイデアが出てきた。

絵本を読んでから→歌いながら絵本を読む→フリをつけてみんなで一緒にやる
手遊びをやってから→絵本を見せて子どもたちによんでもらう

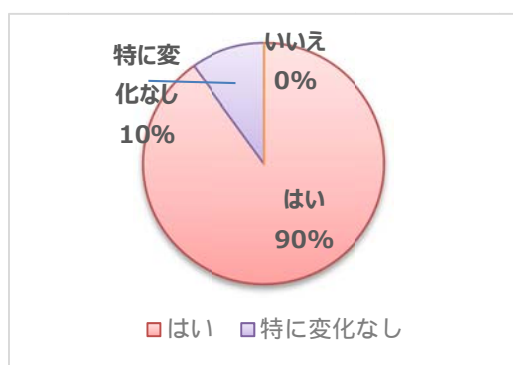
手遊びをして絵本を見せる→子どもたちが歌いながら楽器を持って音をつけるなど、発表会では様々なパターンがアイデアとして実践され、学生が自分自身も考えまた他者からも学ぶことの多い有意義な発表の時間となった。

4. 実践を通してみられた学生の変化

(1) 学生の「手遊び」や「絵本」に対するイメージの変化

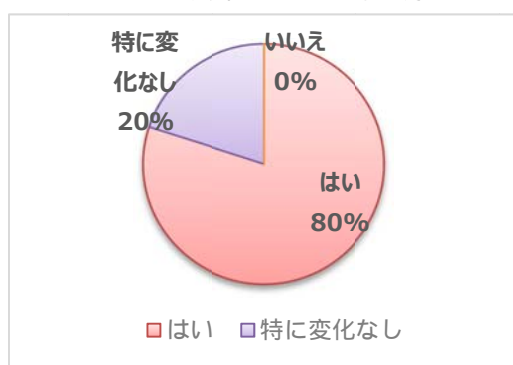
保育の現場では当たり前に使われている「手遊び」や「絵本」について、本実践を通しどのような考えを持ったか、アンケートを行った。

アンケート 1 「手遊び」について考え方やイメージが変化しましたか



記述内容
子どもを静かにしたり、集中させるために手遊びをやっているのだと思っていたけれど、そうではないことがわかった
手遊びをただするのではなくて、絵本や音をつけることでこんなに楽しいものになるんだと思った
手遊びを変化させてもいいことを知ってびっくりした
子どもに合わせて色んな手遊びにアレンジ出来る先生になりたいと思った

アンケート 2 絵本について考え方やイメージが変化しましたか



記述内容
歌や手遊びと融合することで、絵本の面白さが倍になることを学んだ
音楽の授業で絵本を作ると思っていなかったので、出来上がった時オリジナル手遊びと絵本で2倍嬉しかった
どんな絵本なら子どもが喜ぶか考えて想像力が広がった
いつか子どもたちが書いた絵を1つにして、音をつけて一緒に遊ぶ活動がしたいと思った

アンケートに対し「いいえ」と答えた学生は1人もおらず、多くの学生が手遊びや絵本に対し、考え方やイメージが変化し深まったようであった。

(2) 授業を通して学んだこと、成長したこと

本実践を通し、学生が何を学びどのような成長があったか、学生の記述アンケートを記載する。

アンケート 3 授業を通し学んだことや得たことはなんですか

手遊びや絵本、創作活動、色々な活動は全てつながっているんだと学んだ。保育園や幼稚園の先生は毎日たくさんのことをやらなきゃいけないけど、どんな活動も関連しているんだと思った。

自分でオリジナルの手遊びを考えるのがすごく難しく、想像力やアイデアってとても大切なんだと感じた。でも、答えは1つじゃないし自由に考えていいんだと思ったら考えるのが楽しくなった。

何かを自分でつくことはずっと苦手だと思っていたけど、自分で作ったオリジナル手遊びと絵本を発表したあと、自分でもできるんだって自信につながって嬉しかった。

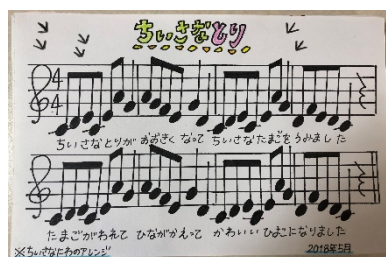
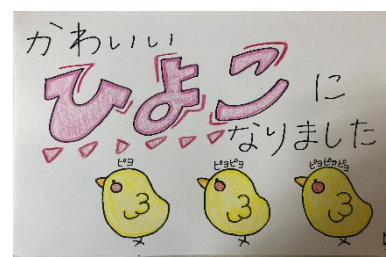
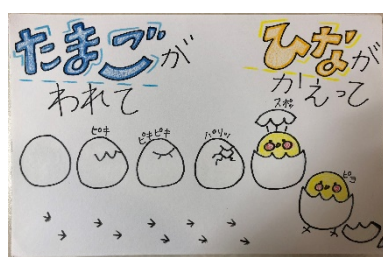
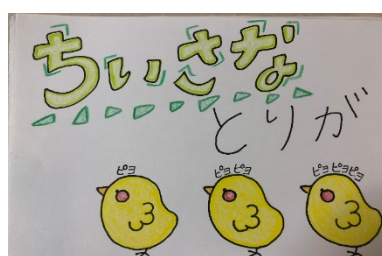
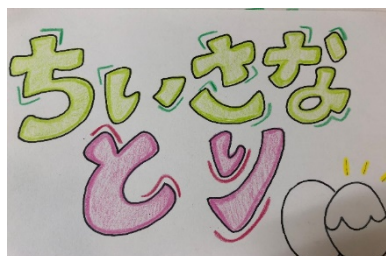
他の人たちが次々とアイデアを出していく様子を見て、すごいなと思った。自分もヒントをもらいながらイメージしていたものが出来上がったので、実習などで絶対子どもと一緒にやりたいと思う。

10 人みんなが違う作品を発表して、それぞれの個性やキャラクターがたくさんつまった、素敵な発表会だった。子どもの個性を伸ばせるような先生になりたいと改めて感じた。

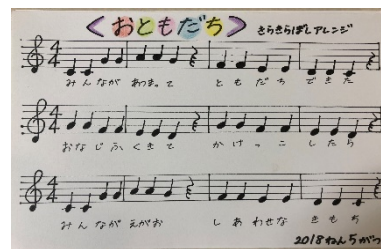
音楽も制作も得意ではないけれど、ルールがないからこそ音楽とかは面白いんだと知った。子どもはもっと色々な可能性を持っていると思うから、先生になったらそういうのを大事にできる活動をしたい。

参考資料 1 学生が作成した作品

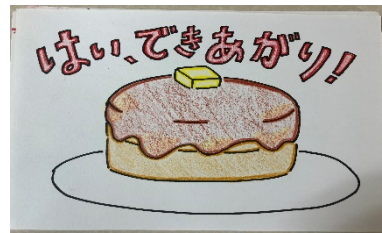
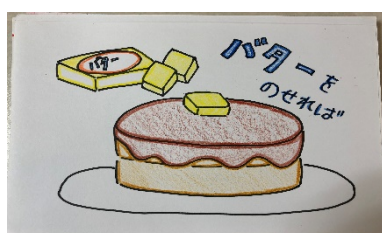
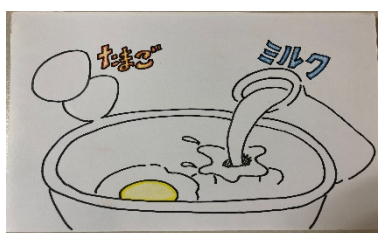
「ちいさなとり」 ※小さなにわのアレンジ



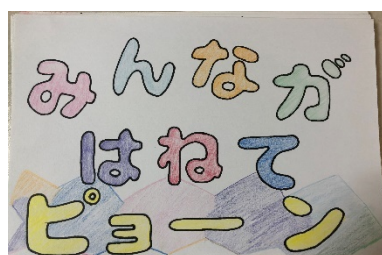
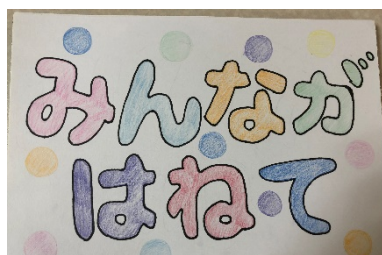
「おともだち」 ※きらきらぼしのアレンジ



「ホットケーキ」 ※カレーライスのアレンジ



「みんながはねて」 ※さかながはねてのアレンジ





参考資料は各学生の許可を得て掲載している

5. 実践からの考察

アンケート結果をもとに、実践を通してみられた学生の変化や成長が、具体的にどのようなものであったか以下の3点について着目した。

（1）感性の育み

感性について、保育の言語研究者阿川(2010)は「物事にふれて感じる心の働き」と述べているが⁽⁸⁾、総合的な表現活動により物事に触れて心が動く割合の多さがわかった。毎時間の学習カードより、1つの活動のみ実践している時とは異なり、多くの学生が様々な表現活動から感じたことをその都度述べている。オリジナル手遊び作成や絵本づくりなど複合的な表現活動の中で、たくさんのかんじ心がかんじ心が揺れ動く場面が、学生の豊かな感性の育みにつながったのではないだろうか。

（2）考える力の育成

本実践では、自分で考えてつくるという活動場面が多数あり、学生にとって重要な作業となった。与えられたことを的確にこなせる学生でも、自分で考えてアイデアを生み出すことは難しく、考えることに長い時間を費やした場面もみられた。考えている時、ヒントとして紙に書きだすことを伝え、「子どもが好きそうなものって？」「なんで手遊びをやるのか？」「創作活動とは？」「現場に出たらこれを使ってどんなことしたい？」など、頭で考えていることがいくつも記載されていた。この時間こそが、考える力を深め学生自身の成長につながっていくのではないだろうか。考える力は、表現力や感性を深めるだけでなく、判断力や決断力など様々なことと結びつき、生きる力につながっていくだろう。

（3）音楽表現の広がり

オリジナル手遊びを作成する時や出来上がった作品に音をつける際、学生は自由な発想で考えて良いということを学び、イメージを広げながら音楽表現をふくらま

していったことがアンケートや学習カードに述べられていた。例えばメロディに歌詞をつける際、明るい感じや楽しい感じ、元気にリズムがのる感じなど、曲の特徴や雰囲気を理解しながら作成していた場面がみられ、また出来上がった絵本には、イメージに合った音選び、鳴らすタイミングやテンポ、リズムなど、たくさんのアイデアが学習カードに記載されていた。自分で考えた内容表現し、実践する学生の姿は楽しんで取り組む様子や笑顔がみられ、保育における音楽力の高まりとともに豊かな音楽表現が生まれた実践であったと考えられる。

6. おわりに

学生の豊かな想像力からたくさんのアイデアが生まれ、表現活動の可能性が広がる実践となった。自分で考え取り組むことの難しさと大切さ、イメージや表現を広げながら活動する面白さ、現場に出た時のことを想像しながら実践する楽しさ、自分だけの手遊びや絵本が出来上がった時の達成感など、学生の気づきと成長がたくさん感じられた。制作過程ではアイデアが浮かばず苦戦する学生もいたが、自分で考えたアイデアが形になっていく喜びと出来上がった時の嬉しさ、作り上げた絵本や手遊びを早く実習で披露したい、子どもと一緒に活動したい、という目標がモチベーションの継続や向上につながったのではないだろうか。表現することの楽しさを学生自身が実感し、音楽活動を通し子どもの豊かな感性を育むことが出来るような保育者養成を今後も目指したい。

注：引用文献

- (1) 文部科学省(2017)「幼稚園教育要領<平成 29 年告示>」厚生労働省(2017)「保育所保育指針<平成 29 年告示>」内閣府 / 文部科学省 / 厚生労働省(2017)「幼保連携型認定こども園教育・保育要領<平成 29 年告示>」
- (2) 保育教諭養成課程研究会(2017)『幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究』p.19
- (3) 石井玲子(2009)『子どもの音楽表現』保育出版社 p.16-17
- (4) 大場牧夫(1996)『表現原理 幼児の「あらわし」と領域「表現」』萌明書林 p.1
- (5) 畠澤郎(2015)『新・音楽科教育法』朝日出版社 p.133
- (6) 中根佳江(2014)『保育者の表現力の変容が及ぼす子どもの音楽的表現力への影響』大阪総合保育大学紀要第 9 号 p.83
- (7) 関東短期大学 シラバス照会 参照 2019-2-28
<https://esquare.tatebaya.kanto-gakuen.ac.jp/up/faces/up/km/Kms00802A.jsp>

(8) 阿川士郎(2010)『子どもの感性を育てる』山口学芸大学研究紀要創刊号 p.1

参考文献

- ・加藤照恵(2009)『子どもの音楽表現』保育出版社 p.173
- ・全国保育士養成セミナー(2017)『子ども・生きる・あそぶ—子どもの最善の利益を保障する保育者—』 p.10
- ・鈴木裕子(2009)『幼児の感性を具体化する試み』保育学研究第 47 巻第 2 号 p.28-29
- ・古田愛子 / 奥田恵子(2008)『保育教材の「手遊び」に関する一考察』岐阜聖徳学園大学紀要 p.37-38
- ・吉野幸男 / 澤田直子 / 木村博子 / 相沢保正 / 石井芳雄 / 松原靖子 / 松村万里子 / 田中常雄(2016)『手遊び指遊び』ドレミ楽譜出版社 p.21-48
- ・阿部直美(2016)『0~5 歳児の手あそび・うたあそび』株式会社ナツメ社 p.11-110
- ・細田淳子(2016)『あそびうた大全集』永岡書店 p.4-128